

---

# 結婚するまで

みもざみもざ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

結婚するまで

### 【Zマーク】

Z8714C

### 【作者名】

みもざみもざ

### 【あらすじ】

「私」が結婚するまでに会った人、やつたこと、考えたこと、たくさん。

## 若い恋

幼いころからの謎。

どうしてパパとママは結婚したんだろうか。

結婚で 一体全体なんなのだろう。

それは思春期を過ぎて

自分が結婚できる環境になつても

ちつとも解決されない謎として

自分で生き続けていた。

生活の中で無意識に考え続けていたように思つ。

部活仲間と試合の帰り

ラケットを肩にかけて歩きながら。

ゼミのレポートに追われて

真夜中に一息つこうとバーへを飲みながら。

平日に会社の休みをとつて

毎晩の電車にゆられて空を見ながら。

したい、とかしたくない 以前に

結婚の正体がわからず

わからないことは私をなんだか不安にさせた。

これがわからないと大人とはいえないんじゃ。。。?

なんて考えちゃつたりして。

今 考えるとなんだか おかしいけど。

初めて、  
これが彼氏ってやつか?と  
思える人ができたのは  
中学生のとき。

絵とギターがとてもうまくて明るい、  
でもなんだか影のある人だった。

私は映画好きの母に  
いろいろおおおおおおんな映画を観せられたせいでき  
分は大人な中学生だった。

「ブリキの太鼓」は小学校3年生のときに観た。  
気分が悪くなつた私をかわいそうと思ったのか  
帰りにファミレスでパフェを食べさせてくれた。  
さすがにおいしくなかつた。

だつて「ブリキの太鼓」だよ??

これが「文芸作品」とかいうやつ???

パフェがおいしくない

ということが悲しかつた。

さらに

おいしくないことを母にいえない自分が  
もつと悲しかつた。

3年後「ブリキの太鼓」の原作を読んだ。  
原作はなんだかわからないなりに  
おもしろく思えてほつとした。

そんな(?)いろんな映画たちのおかげで  
なんというか  
いじめつ子や意地悪な子がいても

まったく気にならず

先生にいやがらせされても  
しょうもない人だなあ、と思うくらいですんだ。

映画を観ていろいろに

人間は心の中に

自由な世界をいくらでも作ってオッケー  
と思うようになつていて  
誰も壊せない自分の世界を幼いころから  
持つことができた。

中学生の彼もそんな世界を持つていた。  
なんだか

「この人は掘るときつとおもしろい」

そう思わせる雰囲気があつた。

外見がふけているワケでもないのに  
妙な落ち着きと微妙な暗さと

話すことや好みが妙に大人っぽいので

「おっさん」と呼ばれていた。

大声で笑つてゐるのに静かな感じがする人だった。

私の住んでいた開発して間もない住宅街から  
少し離れた町に

彼は母親と弟と3人で住んでいた。

そのころは気づかなかつたけど

お母さんは水商売だつたんだと思つ。

畑に囲まれた小さな一戸建てに遊びにいくと  
たくさんおやつを出してくれて  
夕方の5時ころになると

「行つてきます。」と出て行つた。

あっかるいお母さんだつた。

私のことを子供扱いしなかつた。

お化粧が古い日本の映画の女優さんみたいだつた。  
たばこを吸う大人の女の人を始めて身近に見て  
幸せいっぱいじゃないんだな、と思つた。

彼と同じで

明るいけど なんだか影のある人だつた。

彼はいつも自分とちつとも似てない

10歳近く年が離れた弟をとてもかわいがつていた。

ワイルドフ（セブン）と ベンチャーズ。

私たちの世代で知つている人はまずいな  
このマンガとアーティストが彼のお気に入りで  
ワイルドフの絵を真似て描くことも  
ベンチャーズをギターで弾くことも  
おどろくほど上手だつた。  
彼のお父さんの存在は  
このマンガとアーティストから感じた。

当時は受験戦争全盛期。

みんな偏差値で右往左往しながら

自分の夢と偏差値の折り合いをどうつけばよいのか  
必死で悩んだりしていた。

私の母も私の受験でアタマがいっぱいだつた。

成績の上がらない私は

母の夢と私の成績の折り合いをつけるには  
どうしたらいいのかわからなくて

だんだん夕飯の時間がいやになつてきた頃だつた。

でも彼は成績が悪くても

まったく気にせず、のんびりしていた。

だから彼と遊んでいる時間は  
私ものんびり楽しかった。

彼は成績こそ悪かったけれど  
彼の話はいつもおもしろくて  
いろんなことを知つていて  
わからないことがあると  
上手に説明してくれた。

「成績はなくとも生きていける。  
つて言える彼がうらやましかった。

彼は私より

「生きる」つてどういうことが知つていたよくな気がする。  
悲しみもよろこびも大人のことも  
私よりずっと知つていた。

この恋は私の引越しで終わる。

引っ越して1年近くたった頃

高校2年になろうかというときに

彼から手紙がきた。

二人でよく聴いた

井上陽水の「傘がない」の詩が入っていた。

どきどきした。

「君の街に行かなくちゃ。傘がない。」  
詩以外に何のコトバもなかつた。

うれしかつた。

だけどとまどつた。

私にとつては過去のことだつた。

小さい頃からいやなことがあんまり多いから見切りが早くあきらめるのが早い性格になっていた。

失望して傷つくるのがきらいだった。

今でもちょっとやうかも。

携帯電話もない時代。

直筆の便箋一枚の手紙は私の手に重かつた。  
表書きを見て気がついた。

切手がない！！

消印もない！

自分で届けたんだ！ウチまで来たんだ！

彼の家から私の家まで

電車で3時間近くかかるのに。

翌日 迷った末に彼に電話をした。

「久しぶり。」

高校生はドラマみたいにつまく会話なんかできない。

「手紙見た？」彼は明るくきいてきた。

「うん。ありがとう。」

「家まで行っちゃった。へへへ。おどろいた？

ヒマだつたからさ。ウエッちと一人でさ。」

「そりなんだ。びっくりした。」

何も言えない。

私にはわからなかつた。

こんなに離れてるのに、これからどうしたらいいんだ？

私はわからなかつた。

やさしくするのはなんだか偽善に思えた。

彼は明るく

「元気でね。」と言つた。

それにつられて

「うん。そつちもね。ありがとね。」

終わったと思っていた恋が  
ぶわっと復活して  
また終わった。

部屋に戻つて

彼からももらった絵とかマンガとか音楽とか字とか  
見て

大きな箱にしまって

フタに幾重にもテープして棚の奥にしまった。

こつこつとき

少女マンガだとベットに伏して泣いたりするけど  
私は普通に家族と夕飯を食べた。

数年後

大学をなんとか卒業して  
デパートに勤めた。

景気が上り調子のこりで

毎日夜中まで売り場で働いていた。

入社した年の「ゴールデンウイーク」だつたと思う。  
レジの中で商品の包装に追われていた。

「よつ。」

明るくて静かでやさしくてしつかりした  
彼の声がはつきりと聞こえた。

手元の包装紙から目をあげると  
すぐそこに

彼がいた。

息がとまつた。

「なんで？なんで？え？え？」

「またウエッちとかと遊びにきてや。ここで働いてるつてきいたからさ。

元気そうじやん。」

「元気。元気だけど。。。。」

私はどんな力オをしていだらう。  
仕事場を離れられる状況じゃなかつた。  
お昼も食べれないほど忙しかつた。

「またね。元気でよかつたよ。」

彼と数人の同級生が手を振つて去つていつた。  
包装紙に涙が落ちるかと思つた。

それきり。

それ以来会つてない。

それからたくさん時間が過ぎて  
たくさんのこと経験して

今思うことは

当時

「今の私の恋なんて長い人生の中で小さこと」と決め付けて

未来にばかり気をとられて

すぐ近くにいた

やさしくて深い彼の心を

はねのけてしまった

おろかな自分のこと。

弱い、臆病な自分のこと。

なんてなんて素敵な人だつたんだろう。  
もつともつと話せばよかつた。  
もつともつと会えればよかつた。  
ありがとうつて  
もつと言えばよかつた。

私のことを

ずっと何も言わないで  
想つてくれたやさしさを  
うけとめられずに  
逃げてしまつた  
私の若い恋のこと。

## あばれんぼり

なんで暴れてばっかりいるんだろう。  
いつたい何のトクがあるんだろう。

小学校で田立っていた暴れん坊のKは  
毎日のように

教室の備品を壊しまくっていた。

当然、女子からも敬遠されて

Kがやつてくると

みな 大事なものをかばんに隠した。

中学生になった。

廊下でうじろからいきなりKの声がした。

「おまえさあ、ブラジャーしたほうがいいよ。  
どいでも不良は

まわりよりマセている。

その日私は母にやつあたりした。

映画好きの母は

クラシック好きでもあった。

田舎に住んでいたのに

たまに市のホールに外国の室内楽などが来ると  
必ず私を連れていった。

小学校4年生のときにイ・ムジチがきた。  
会場で

Kと母親を見た。

蝶ネクタイとブレザーのKに驚いた。

以外なことにKはバイオリンを習っていたらしい。

Kは小学校の後半から中学の途中まで父の仕事の都合で外国で暮らしていた。不良の雰囲気は変わらなかつたがなんとなく

洗練されて帰つてきた。

女の子の扱いもうまくなつていた。が、私にとつては

「廊下でブラジャーをすすめた  
イヤなヤツ」  
のままだつた。

大学に入ると

それまで女子高で3年間  
まじめにやつってきた反動と  
バブルのムードがばつちり合致して  
私はやりたい放題。  
当時の女子大生は  
時給のいいバイトには困らなかつた。  
私はすつかり遊び人になつた。  
お母さん、「ごめんなさい。

中学のころにやつて  
楽しかつたバンドを  
またやろうと思つて  
バンドサークルに入った。

小さな部室ではいつも  
聴いたことのない

ブルースやロックやジャズを

ギター やピアノで奏でる先輩がいて

何時間いても飽きなかつた。

授業はそっちのけで通いまくつた。

ライブハウスで楽しい音楽を

聴くのはなによりも幸せだつた。

大学の部室から

JRの駅まで歩くと20分ちよつと。

ずっと店が続くなかなか楽しい道のりだ。

まんなかあたりに

1階の壁に大きな青りんごの絵が描かれている  
ちいさな白いビルがあつた。

青りんごの右に緑色のドアがあり  
5時をすぎると開け放されていて

ちょっとのぞくと地下へのちいさな階段があつて  
通るたびになんとなく目がいく。

梅雨の終わり頃のさわやかな夜、

サークルの女友達と

その店の前まできたら

開け放した緑のドアから

なんとも楽しそうな

笑い声が聴こえてきた。

「地下」で「様子が見えない」ので

入るのをためらつていたが

その夜はなんだか許されるような気がして  
二人で恐る恐る階段を下つていった。

小さな小さな店だ。

カウンターは7席くらい。

4つのテーブルのうち2つに  
ギターをかかえた

外国人がブルースをやつてた。

「うわーおーうまい！」

心の中で叫んだ。

ハンプティダンディのようなおじさんが  
カウンターの中で  
うまそうにパイプを吸っていた。  
オレンジのTシャツが  
妙にさわやかでおかしかった。

「おーいらつしゃい！  
2人？どうぞどうぞ」

予想に反して

嘶家みたいな軽快なしゃべり。

「へー。女の子2人は珍しいね！何にする？」  
「。。。ジンライム。。。2つください。」  
のんべ女子大生である。

カウンターは居心地がよかつた。

音もよかつた。

外国人のギターも歌も  
店の真空管アンプも。  
ハンプティダンディの選ぶ  
ジャズのレコードも。

お客様さんもよかつた。

半分はスーツだった。みんな男。

なんだかわくわくした。

「あのさあ、どっかウチでバイトしない?」

唐突に

ハンパーティダンパーティが言つ。

「私はむり。他やつてるし。」友達が言つ。

「私やります! ジャズききたいし!」

思わず手をあげて言つた。

「じゃさ、月曜日の4時すぎくらいにきてね。」

私たちのことを

とくに詮索しないで

バイトに誘つのが驚きだつたが

ここにいれば

おもしろい人に会えそしだと

直感した。

高校までほほ「無菌」な環境だつた私は  
人間に対する好奇心いっぱいだつた。

大学1年の夏休みに

私は前に住んでいた町に

遊びに行つた。

まだ友達が何人も住んでいて

泊めてもらつた。

おさななじみとの再開は

想像以上に楽しく、何時間も一緒にいた。

夜中に近所をみんなで散歩した。

後ろから声がした。

「いいオシリしてるじゃん。」「はあ？」

振り向いた。

Kだ。

いつから合流していたんだろう。私は無視した。相変わらずなんてヤツ。

でもなんだか ちょっとうれしかった。

戻ってきて3日目に

電話がきた。

「Kだけど。どつかで飲もうよ。」

外国にいたときの話がおもしろそうだったのでハンプティダンプティの店で会うことにしてた。

「だけど今日はそこでバイトだから

「10時頃終わるからそれからちょっと飲むってカンジでいい?」

「いいよ。カウンターから話せるし。早めにいくよ。」「下心だらけなんだろうなー、とあきらめつつ

「おつけー。」

バイトは6時から。店は6時半から。

そして6時45分。

階段をおりてくる足音。

なんとスーツを着たKだ！

あの暴れん坊がスーツ！！！！

心中で大笑い。

Kにしてみれば

ジャズの流れるカウンターバーなんて  
背伸びるべき大人の空間に思えたんだが。  
こっちはTシャツにジーンズなのに。

でも

私にあうために

きちんとした格好をしてくれたことが  
とてもうれしくなった。

「かつこいいじゃん！似合つてると。  
とりあえずバドでいい？」

Kは心底ほつとした、というカオをした。

Kは私の守備位置の正面の席に座った。

それにしてまだ7時前。

私があがるまで3時間はいないだろ？なあ。まつたく。笑。

その日は結構混雑して

やつぱり仕事中は落ち着いて話せなかつた。  
暴れん坊のKは隣に座つた常連と話したり  
ハンパーティダンパーティとお酒談義をしたり  
ゆっくりロックを飲んだり

予想以上に楽しそうに過ごしていた。

外国で習つたのかい？とからかいたかったけど  
我慢した。

「彼も待つてるし、もつあがなんよ。なんか店空いてきちゃつたし。

」

9時すぎにハンパーティダンパーティがあがらせてくれた。  
一緒に一杯づつ飲んで

ハンパーティダンパーティにお礼を言つて店を出た。

「よく長い時間いたねえー！」

私は素直に驚いてそう言った。

「話したかったからね。」

私以上に素直な返事にこまつてしまつた。

ほめられたり好かれたりするのは慣れてない。

今夜だつて

ちょっとしゃべつて一晩とまつて

バイバイ

くらいの氣でいた。

最低だけど。とにかくその頃はそんな日々だつた。

Kのいた国はラテン系で

何もかも日本と違つ暮らしの話は

とてもおもしろかつた。

最初はコトバで苦労したけど  
暴れん坊にはぴったりな風土で

とても楽しかったようだ。

帰国子女として坊ちゃん高校に入り  
高校生のころから

六本木で遊びまくつていつたそつだ。

なるほどね。

そろそろ終電だ。

「新宿に12時に着かないともすこからだ。」

私は席を立つた。

「じゃあ、新宿まで送るよ。」

「へ? いいよー。子供じやあるまいし。  
なんだかめんどうやくなつて

私は言つた。

「じゃ、そのままKの部屋にいこうよ。  
Kのアパートはすぐ近くだつた。」

最低だけど。とにかくその頃はそんな日々だった。

Kは最初困った力オをしたけど

「何もしないから大丈夫だからな。」と了解した。  
2人とも

もつと話したいなあという気持ちは一緒だつた。

Kの部屋でコーラを飲みながら

夜中の2時くらいまでしゃべつた。

「あー、疲れた。寝よ。」私は床に  
寝つこうがつた。

Kは私にタオルケットをかけて  
自分は台所のほうの床に寝た。

3分くらい経つただろうか？

「しないの？」私はたずねた。

して（されて）当然、と思つていた。

男の子からおもしろい話を引きずり出すには  
この行為がついてくる。と思つていた。

ものすごく予想外の答えが返つてきた。  
「大事にしたいから、しないんだ。」

「へ？」

「よくないから。そんなんじゃないから。  
ちゃんと彼女にしたいから。

したいけど、しないんだ。」

何も答えられなかつた。

自分のことを持つても汚く思つた。

私は「愛」とかわかんない人間なんだ。

その時に実感した。

Kは私をがつちりと束縛した。

自分以外の男と2人で会うことは許さなかつた。

男の子とのかけひきみたいな  
付き合いに疲れかけてた私は  
楽になつた。

Kの言うことをきいていればいい。  
守つてもらえる。大切にしてくれる。  
いつか結婚しようということになつた。

Kは外国から帰つたあと  
ろくに勉強をしなかつたらしく  
2浪していた。

私は先に社会人になり  
Kのアパートの近くに  
自分もアパートを借りた。

半同棲がはじまつた。

学生結婚した母に

「結婚する前にじばらく一緒に暮らして見なさい。」

と言われたときはびっくりした。

まじめな母が同棲を公認するとは！

私は夢中で働き

Kは相変わらず大学生だつた。  
働きながらも家事をやらなきや  
と、かなりがんばつた。

KもKなりにいろいろがんばつた。

残業で疲れた日だったが  
最近外食が続いているので  
無理をして夕飯を作った。

Kは連絡もせずバイト仲間と飲んで  
夜中に帰ってきた。

私は何も言わず

お皿の中身をゴミ箱に投げ捨てた。

Kには仕事のグチを言わないようにならした。  
そのかわりKのグチをきく余裕もなくなっていた。

Kも就職した。

2人とも忙しくて休みの日は疲れて寝ていた。  
会社の人とばかりしゃべつて。

Kとたくさん話したのはいつだっただろう。

Kも疲れてる。

でも私もとても疲れているから  
Kをかまう余力がない。

誰か助けてほしい。

疲れた気持ちを救つてほしい。

疲れて帰つて 部屋にKがいると  
ため息が出そうになつた。

クリスマスが近づいた冬の日  
私の仕事場にふらつとやつてきた  
学生時代の仲間の一人と  
私は寝た。

それから何日かたつた。

残業を終えて遅い時間に部屋に帰ると

Kが

電気もつけずに座っていた。

Kが泣いていた。

「なんでしたんだ？」

「。。。。わからない。 しんどかった。」

私は逃げたかった。

自分は逃げたかったのに

出て行こうとするKを必死で止めた。

玄関にイスを積み上げて

道をふさいだ。

泣きながら興奮して動いているのに

アタマの隅はなんだか冷めていて

「ドラマみたい」と思っていた。

一人になるのは耐えられなかつた。

最低だ。自分勝手。だけど

どうしてもKと話したかった。

Kは出て行った。

私は朝までベッドにすわり

雑誌をこまかくちぎつて過ごした。

それから1年後

Kは会社の人と結婚した。

その1年後

中学時代にKとも私とも仲が良かつた

太郎から電話がきた。

「最近Kと会つた？」

「へ？ 会うわけないじゃん。 太郎ちゃん元気だつた？」

「今からさ、言つけどさ、驚かないでくれよ。」

「なに。。。やなこと？ Kどうかしたの？」

暴れん坊のKの力オがいきなり脳を占拠した。

「まさか、死んじゃつたのつ？」

「違うよー。」

「じゃ、事故とかで。。。腕がなくなつたとか？」

「違うよー。こえーなあ。」

「なによー。」

「。。。。婦女暴行だよ。」

「。。。。。。え？」

腕がとれたのではなくてよかつた。瞬間そう思つた。

「団地でさ、会社の帰りにさ、女人の人つけてさ、やつちやつたんだつて。

ケーサツ、お前のことも知つてたぞ。オレにききにきた。  
しかもさ、シラフだつたから、余計に罪が重くなるつて。

ワイドショーで力オが出ちゃつたつてさ。」

「。。。。そう。そつか。そつなんだ。」

奥さんはどうしてるんだろう。

詳しい人にきいたら

3年くらいで出てくるよ、と言われた

暴れん坊のKとの  
不器用な恋の話。



## サトルコ

大学時代から就職3年目まで  
一人暮らししていたアパートのそばに  
美容院があった。

サトルコはその美容師。  
ほんとは「さとる」。  
心が女性だから「サトルコ」。

初めてその美容院にいつたときに  
私を担当したのがサトルコだった。  
私は美容院が大の苦手。  
緊張するし気は使つし  
とても疲れるのだった。

「だいぶお疲れね。」

「今朝まで飲んでたから。すみません。」

「あらやだ、あやまつたりしないでね。  
大丈夫。疲れもどつてあげるから。」

本当だつた。

電車や街中で他人にふれるのさえ苦手な私が  
サトルコの手には拒否反応をしめさなかつた。  
気持ちがいい。

お母さんの手つてこんな感じだつたんだろうか。  
もうそんな感覚、忘れていた。

「はい。会員カードはこちゅ。  
あんまり夜遊びしちゃダメよ。」

美容院を出ると

雨があがつたばかりで

いつも薄汚れて見える商店街も  
日が差して清潔に光っていた。  
気分はすっきり軽くなっていた。  
こんなのは久しぶりだ。

それから

いやなことがあつたり  
体調がいまいちだつたりすると  
サトル「」のところに通うよつになつた。

「あなたねえ、

そんなに遊んでばかりで卒業できるの?..」

「卒業は必ずするよ。親にお金出してもらつてるから。」「卒業の前に体壊すんじやない?..」

正直、そのころは  
Kと別れてから

自分が何のために

毎日息をして生きているのか  
さっぱりわからなくなつっていた。

なんだか懸命に  
働いてばかりいた。

稼いだお金で

できるだけいろんな人間に  
会おうとしていた。

男の人たちとも

相変わらず遊んでいた。

軽い付き合いは

悲しい気持ちを

ちょうど良くほぐしてくれたけど  
無意味だった。

「こんななんじやいかん! とは思つてるんだけどや。」

「いいわねえ。まつたく!」

「サトルコはや、美容師楽しい?」

「こんな楽しい仕事ないわよ。」

自分の手で人様をきれいにできるんだから。」

「私ね、小さい頃からそういうのないんだよね。」

何かになりたい、とかさ。ないから大学いったの。

でさ、就職もさ、なんとなくさ。」

本当だつた。

夢を持ちなさい と言われ続けたけど

どうやつたら持てるのかわからなかつた。

成績が悪い子は夢の前に成績を上げないと

何もできないと思い込んでいて

そのままこんな年まできてしまつた。

サトルコは何人か友達を紹介してくれた。

みんな心は女性だつた。

やさしくて、やさしかつた。

私が今まで知らなかつた

大きくて広いやさしさだつた。

「もつたいないわねえ。女に生まれて手入れしないなんて。」

「化粧も適當ねえ、まつたく!」

「くわえタバコだめっ!! 吸うなら輸入物にしなさいっ!!」

しかりながら

いろんなことを教えてくれた。

男の気持ちにも

女の気持ちにも

人間の暗い部分にも詳しかつた。

「最近、いい感じだねえ。大人になってきたかな？」  
サトル「たちと遊ぶようになつてからしばらくして  
バイト先のバーのハンプティダンプティみたいなマスターに  
ほめられた。

週に一度だけだつたけど  
就職してからも気晴らしに手伝つていた。  
そういうば

バーでお客さんと話すのも楽しめるようになつていた。  
サトル「たちのおかげで  
知らないうちに  
聞き上手になつっていた。

持ち場のカウンターの前に座つたお客と  
グラスを洗つたり  
ピザにのせる野菜を切つたり  
氷を出したりしながら  
おしゃべりするだけだけど。  
彼らの目的は

マスターのレコードコレクションを聴くこと。  
自分のお店が終わつてからやつてくる人も多かつた。

相手がどんな人か  
どんな人生でどんな悩みがあつて  
どんな気持ちでこの店に来たか  
想像してもなすのがとても楽しかつた。  
さらに お客 と 従業員 という立場が  
前提のやりとり、というのが楽だつた。  
なにか相談されても

あんまり親身になつてはいけないし、相手もそれはわかっている。

「水商売向いてるねえ。」

よく言われた。自分でもそう思つた。

天涯孤独だつたら

とつくにお店をやつてるような気がする。  
まあ、そんなに甘いものじゃないけど  
魅力的な仕事だとずつと思つていた。

「ネグって何でも 広く、浅く、よね。

人とつきあうときも、 何か考えるときも。」

サトル口は髪の毛のネグセも直さずに美容院にやつてくる私を

「ネグ」と呼んでいた。

「広く、浅く。。。軽く、かもね。」

「やあねえー、若いのに。もつとなんでも  
つっこみなさいよ。成長しないわよ。」

つつこんで何かあつたとき耐える体力が  
私の心には残つてなかつた。

いつたい何に使つてしまつたんだらう。

いつからこんなにカラカラになつちゃつたんだらう。

今は大キレイな人もいない。平和だ。

でも大好きな人もいなかつた。

毎日を淡々と消化して誰にも迷惑はかけてない。  
そつなく生きてる。いいことじやないか。

だけど、

いつもシャツの背中が破れて

スースーとつめたい風が通つてる気がした。

寒いときは自分の腕で自分を抱きしめるしかなかつた。

サトル口のブロードがやさしくて、あつたかくて

泣けてきた。

「ちょっとーー！お店で泣かないでよーーー！」

営業妨害じゃない！」

私は泣きながら笑つて言つた。

「もうちょっと前髪切つちゃつて。」

「はいはい。お嬢様。」

「ネグは男がいないとダメなのよ。

独りはムリなタイプ。なのに  
自分から好きにならいのよ。」

夜になつて心配したサトル「が  
電話をかけてきた。

「しかも、しかもよ？

もがくのもキライ。失敗するのもきらいでしょ？」

もつと言つて。もつともつと。

「自分のことをさらけ出せない人はね、

人からも見せてみられないのよ。」

きいてんの？」

「。。。。うん。きいてる。」

「人間つてのはかつこ悪いもんなのよー。

なんでも下手なのよ。みんなさびしいのよ。

寂しい寂しいってね、泣いてさ、おじつてさ、

ドジつて後悔して 転んで 泥んこで生きてくもんなのよ。」

「うん。」

「ネグは一度転んだのよ。大失敗よ。」

Kのことだと思つた。

「その大失敗をさ、

あんたつたら金庫に入れてぐるぐるに鎖巻いて湖に沈めたのよ。  
だから心がからつぽになつちまつてんのよ。」

「。。。。。。うん。。。タバコ吸つていーい？」

泣きながら火をつけた。

深く吸つてからきいた。

「あたしさ、なんか。。。。樂になりたい。

なんかね。。。毎日ね。。。しんどいよ。

平気なんだけどね、普通に暮らせるんだけどね、  
しんどくてね。

でもこんなこと人に言つたってや、言われたほうも  
困っちゃうでしょ？でもさ、もうさ、

なんか。。。どうしたら樂になれるかなあ。」

こんなふうに誰かに訴えたのは生まれて初めてだった。  
しゃくりあげる私を 数分ほつといてから

サトルコは静かに言つた。

「。。。。金庫の中身を受け入れるのよ。

中身をよく見てプラスもマイナスも

人生の通帳にちゃんと記帳しとくのよ。それだけよ。」

「。。。。。便利だね、その通帳。」

「でもね、便利だけど一生捨てらんないのよ。  
捨てちゃだめなのよ。書き換えもできないのよ。」

サトルコの声がいつもより男っぽかつた。

「。。。ほんとだ。。。私、男がないとだめなんだ。くくく。  
「ばーか！また髪きりにいらっしゃいね。待ってるわよ！」

小さなベランダに出て外の空氣を思い切り吸つた。

星が。。。出てない。月もない。

近くの幹線道路の車の音が

ぼやけたかんじで響いてくる。

小さなグラスにウォッカを注いで

何もない空に乾杯した。のどがやけた。

「ほんとにいいのね？オッケーよね？」

「はい。思いつきりいっちやつてください。」

サトルコにベリーショートにしてもらつた。

だつて私は大失恋したんだから。

「うわー、すごーい！男みたーい！」

でもなんだか

小さい頃のおかつぱだつた自分に戻れそうで  
うれしかつた。

「サトルコ、電話、ありがとね。」

「。。。まあね。」

「お礼はどうすればいい？」

「そうねー、若くていい男、紹介してもらおうかしらね。」

友達以上の友達に教えてもらつた  
生き方の話。

## スケッチ

学生時代から結婚するまで  
ほぼ毎年

独りでアメリカに行つた。  
なぜアメリカかと聞かれて  
たいいした理由はない。

東京でなくて

日本でなくて

思い切り時差があるところ。  
でも今回は理由があつた。  
先月Kと別れてから続いた  
荒れた生活から離れたかった。

離陸の瞬間が好きだ。

特に社会人になつてからは。

1週間から10日くらいの休みを作るために  
休暇の前はしゃかりきになつて  
仕事をこなした。

ボロボロになつて

そのへんの温泉にでもいくような  
適當な中身の小さな荷物と  
飛行機に乗り込む。

「よし。敵もここまで追つてこまい。」

「敵」はそのときで

いろいろだが

自分以外のすべて

だつたかも知れない。

飛行機が宙に浮きあがると  
心からほっとして

枕2個と毛布をもらつて

ひとつを腰とシートの間に

ひとつをおなかとシートベルトにはさみ  
アタマから毛布をかぶり

気を失うように眠つてしまふ。

たまに食事に起きることもあったが

ほとんどは

着陸の衝撃で目が覚める。

なぜかノースウエストの時だけは  
衝撃が感じられなくて

出口に向かう人たちのざわめきで  
目覚めた。

通路に出口へ向かう人の列が  
ずーっと続いている。

私はのんびり

列が流れるのを眺める。

いろんな人が

まだ見えない目的地を見つめて  
静かに急いでいる。

もう最後かな

という頃に立ち上がり  
のんびりと飛行機を出る。

ここからは

だらだらしていると  
やられてしまうので

緊張せざるを得ない。

値段を確認して

街までのタクシーにのりこむ。

運転席の背面の

分厚いアクリルと

(割れたところは灰色のテープで  
頑丈に補強されている)

ドライバーの

太くて黒い首に光る

重たそうなチエーンのネックレスが  
私をさらに緊張させる。

が

まるでここに住んでるのよ

みたいな才覚をして

景色を眺める。

女優気分である。

15分くらい走ったころ

「音楽をかけていいか?」

ドライバーがきいてきた。

「趣味のイイヤツにしてね。」

と答えると

「何だよ! 英語わかるのかよ!」

みたいなことを

うれしそうにまくしたててきた。

一人旅の安全を守るには  
ある程度の言葉の習得は  
かかせない。

ボブ・マーレイだ。  
いいじやん。

今回も

学生時代から来ている宿にした。  
一週間単位で安く泊まる。

J・F・ケネディという

ふざけた名前の

マネージャーがいて

ずっと住んでる人も多い。

日本人の学生もいた。

建物は古いが

清潔にリフォームしてあって  
ベッドも大きく

毎日ちゃんと掃除してくれる。

ただ、

その裏通りは

ちょっと危ない

ストリートだ。

よく夜中に

「SOME BODY ! ! ! ! !

と助けを呼ぶ声が聞こえた。  
もちろん死にたくないから  
田をさわひとつぶるだけ。

いつもお気に入りの部屋に  
落ち着きほつとする。

この宿にチェックインしたら  
旅の目的の半分以上は達成している。  
ベッドに仰向ける。

白い壁。

大きな木のドア。

白い窓枠に区切られた

真つ青な空。

真つ白な雲。

乾いた空気。

廊下から聞こえる

英語。

気持ちいい。

なんて気持ちがいいんだろう。

ここまで離れないと

心が開放されない私は

病んでるんだろうな。

と思う。

それはKと付き合つ前から  
変わらない。

今年は

何人の友人が

この宿に残つてゐんだろうか。

ラウンジに降りてみる。

コーヒーと紅茶は24時間飲み放題だ。

朝と夜もここで食べられる。

玄関もラウンジも見渡せるカウンターには  
いつもJ・F・ケネディーがいて

みんなを和ませる。

彼はJと呼ばれている。

「リタ、ひさしごりだねえ。」

Jが勝手に私のことを「リタ」と呼ぶので  
ここでは「リタ」が私の名前だ。

なんで「リタ」なんじや。

最初は恥ずかしかつたが  
もう慣れた。

「紅茶もらうね。」

午後の4時。

学生は学校。

仕事がある人は仕事中の時間だ。

静かだ。

食堂の入り口に見えるソファでは  
ピンクのカーディガンをはおった  
金髪の老婦人が新聞を読んでいる。

キャシーだ。

キャシーは細身だけど

毎朝ドーナツを6個と

砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを3杯  
食べる。

昔は教師をしていたらしが

事故を起こしたかなにか

トラブルがあつて地元にいざらくなり  
この街に来たらしい。

何十年も前に。

とりあえず英語をもうちょっとと思い出さないと  
と思って

キャシーとおしゃべりした。

教師だつただけあつて  
キヤシーの英語はきれいで

わかりやすく

正しい発音も教えてくれる。

1時間くらいしゃべつていたら

知つた顔が何人もラウンジに集まりだしたので

「キヤシー、あとでね。」

とラウンジに戻ろうとしたら

「リタ、悪いことはダメよ。」

と言われた。

「悪いこと」。

この宿は

MBAを目指す学生から

ホームレス寸前の荒れてる人まで

自由に暮らしている。

日常の中でカソタンに

「悪いこと」ができる環境だ。

私はこの宿で「自由」の厳しさを知つた。

自分を守るのは自分。

一緒にお茶を飲んでるこの仲間の中で

一人はあやしいクスリを運ぶバイトをしている。

一人はチャイナタウンで傷だらけになつて倒れていたし

一人はスーツの数人に突然連れ出されたりしてたし

今は笑つてしまってるだけだけど

かなりアブナイ人生の人も多い。

そして普通にそういうことに誘われる。

はつきり断れば大丈夫だけど。

私はそういうことはしない、と宣言してあるので

そういう「悪いこと」をするときは

「リタはあつちにいつてな。」と追いやられる。

そして次の日

何もなかつたように挨拶する。

ここにいる間は

なんだか映画の中にはいるように感じる。  
へたくそな英語を使っているせいなのか

それとも一人旅の緊張か

あるいは旅先だという気楽さなのか、

アタマの中も性格も

日本にいるときより

はつきりとテキパキしている。

こんな風な自分も結構好きだ。

メソメソしても

誰も気にしないよ。

そんな空気が気持ちいい。

私って

冷たい人間なのかもしれない。

旅行中に寂しくなつたり  
静かにすごしたくなると  
一人が当たり前の場所、  
美術館に行く。

静かで空気がきれいで  
街中よりは安全で  
何時間でもいられて  
トイレもきれい。  
カフェもおいしい。

私は  
イタリアの古い肖像画が好きで

背もたれのない大きなソファに腰掛けて  
ずっと眺めていられる。

よく知らないが

絵の人物が持っている

本や道具などが

帽子や洋服などが

その人の職業を表しているらしい。

レースやシルクやビロードや毛皮やシフォンを  
木や紙や金属を

筆で描きわかるなんて。

この人はこの変な形のヒゲを  
どうやって洗ってるのかなあ。

この本は汚れているけど

辞書なのかな。専門書なのかな。  
どうしてこんなおっさんが

こんなにきれいなレースの襟を  
つけてるんだろ？。

時間が止まる。

たまに警備員交代のおしゃべりが  
きこえる。

「IJの絵が好き？」

突然英語で話しかけられて驚いた。

そうだ。

日本じゃなかつたつけ。

緑の目に金髪。

Tシャツにジーンズ。

大きなザック。

歩き倒したブーツ。

の男。

無視するべきだけど。

その日はさびしかつた。

「。。。この部屋が好きなの。」

深紅の壁紙の

肖像画しかない部屋。

いかんいかん。

背筋をのばして立ち上がり

その部屋を出た。

宿に戻ると

ソファでキャシーが編み物をしている。

今日のカーディガンは

薄い藤色だ。金髪に良く似合う。

「キャシー、今日ね、美術館で

キャシーみたいにきれいな金髪の男の子に会つたよ。」

「リタ、遅かつたのね。夕飯にまだ間に合つかしら。」「キャシーはもう済ませたんでしょう？」

「私、サンドイッチ買つてきたから部屋で食べる。」「私の部屋にいらっしゃい。おいしいココアがあるのよ。」「ウチの紅茶もおいしいよ、リタ。

電話くれば夕飯とつておいたのに。」「カウンターの」が口をはさんだ。

夕飯は8時までに食堂に来ないとありつけない。

「ありがと、」。うつかりしててや。」

英語つて

会話に

「ありがとう」つづつける」とが多くて  
好きだ。

「それで、その男の子と話したの？」

ココアを私に差し出しながら

キャシーは目を輝かせてきいてきた。

「まさか。危ないじゃない。」

「あら。そうなの。そうね、そうよね。」

日本人の女はすぐひつかかる

という風評のせいで

私は必要以上に警戒していなければ  
ならないのだ。

「ほんとはさ、話したかったんだけどさ。」

「美術館で出会うなんて素敵ねえー。」

キャシーの中では

勝手に物語が始まっているみたいだ。

「キャシーは今、好きな人いないの？」

「ふふふふ。いたのは昔。昔々よ。

リタはどうなの？」

「いたんだけど。。私が浮気して  
こないだ別れちゃったの。

それから遊びまくつてる。

でも寂しくつてさ。

だからここに来たのかも。」

英語だと語彙が乏しい分

何でも素直に言える。

「よく来たわね、リタ。

行動するのは良いことよ。」

キャシーは何も聞かずに

軽く背中をなでてくれた。

涙がぽたっと落ちた。

メソメソしてたらダメなのに。

でも泣いた。

泣いちゃつたよ。

そういうえ

別れてからしばらく

泣いたり怒つたりしてなかつたなあ。

ちょっと泣いたら

ちょっと心が軽くなつた。

「さ、泣き終わつたら食べなさい。」

「えー、こんな悲しいのに食べるのー???

「悲しいのに食べなかつたら

もつと悲しくなるでしょ?」

キヤシー先生は厳しかつた。

「食べたらあたたかくして寝なさい。」

「。。。。はい。」

何年かぶりに生徒扱いされて

甘い気持ちになつた。

「リタ、あなたの人生は

はじまつたばかりなのよ。」

こんなセリフ

日本では女優にでもならない限り

きけないかも。

素直にうなずいた。

その夜はいつもより早くベッドに入り  
よく眠つた。

2日後

また美術館に行つた。

入り口の前は大きな大理石の階段で  
みんな思い思いの場所に座つて  
パソコンしたり

キスしたり  
キャッチボールしたり  
寝たり  
食べたり  
読んだり  
論じたり  
大道芸の練習をしたり  
それを見て楽しんだり  
ワゴンのソーダを買って飲んだり  
電話したりして  
私は  
持ってきた小さめのスケッチブックを開いて  
絵を描いた。  
人や風景じゃなくて  
心にうかんだものを描いた。  
ハート。  
そのハートの真ん中にビビを描く。  
ハートを青く塗りたくなった。  
ミュージアムショップで  
小さな色鉛筆のセットを買って  
青く塗つた。  
そつか。  
今の私、やっぱり結構しんどいんだ。  
納得した。  
このハート  
どうしたら  
あたためることができるんだろう。  
はああ。  
あたしつてかわいそづ。  
なんだかおかしくなつてきた。

「ヒビがはいつても

ハートは赤く塗らなきや！」

後ろから声がした。

縁日の金髪。肖像画部屋の彼だ。  
なんだかいろいろ警戒するのが  
急にばからしくなった。

日本で遊びまくってるくせに

ここで格好つけてどーするよ。

「このくらい冷えてるってことよ。」

「おおおおお寒い！凍えそー！」

「ほつといてよ。」

私はスケッチブックを閉じて  
公園へ向かって歩き出した。

「一緒に歩いていい？」

「いいよ。暇なのね。」

「S大つて知ってる？日本の。  
僕はあそこに3年いたんだ。」

S大！わが母校。

「ふーん。じゃ、日本語わかるんだ。」

「ハイ。ワカリマス。ヘタデスガ。」

いきなり日本語だ。

「ソウデスカ。ワタシハ エイゴガヘタデス。  
へんな会話。

ヘタな日本語とヘタな英語で盛り上がった。  
気がつくと

公園のベンチでは寒く感じる時間になっていた。

「リタ、キスしよう。」

「今度ね。」

笑いあつたまま 明るく別れた。

「また彼に会えたのね。よかつたわ。」

キャシーが物語の続きをきいて喜んだ。

「でも、キャシー、これって悪いことではないのかなあ。」

「悪いことにするかどうかはリタ次第でしきり?」  
「。。ふーん。

じゃあ、セツクスはしないことにする。」「リタの思うとおりにしなさい。ただし

何事も丁寧に考えるのよ。

丁寧に考えれば失敗しても  
パニックにはならないわ。」

日本人の私がわかるように

カンタンな単語を選んでくれる。

あつという間に

明日帰る、といつ日になつた。

散歩に出た。

やつぱり足は

美術館の方に向いた。

会えるわけない。

会えないのに。

肖像画を眺めても

なんの想像もできない。

「だめだな、あたしつて。」

悲しいときは食べろという

キャシーのコトバを思い出して  
美術館の中のカフェに行つた。  
明るい日が差す中庭がきれいだ。

かわった彫像があつて  
スケッチしている人がいる。

大きなザック。

金髪。

まさか。まさかね。

中庭を囲むようにある

カフェのガラスの壁を一周する。  
彼だ。

一生懸命

スケッチしている。

私は彼の死角になる席に移り  
スケッチを眺めた。

うまい。

そつか。美術の勉強もしてゐるのかもな。

そつかそつか。がんばってね。

そんな彼を見れただけで

なんだか満足した気分になつた。

もう帰ろう、と席を立つたとき

彼がふつと視線を上げて

スケッチ帳をパラパラとめくつた。

あるページでとまり

じつと見つめている。

私だ。

ハナペチヤの見慣れた力才が  
そこにはあつた。

私を描いてくれたんだ。

心臓がドキドキした。

何分くらいそこに立っていたんだらう。

動けなかつた。

ただのスケッチの練習だよ。

自分にいいきかせた。

普通に挨拶してちょっとしゃべつても

いいじゃない。

彼に声はかけられなかつた。

あそこでもし

彼が振り向いていたら。

もし

私が声をかけていたら。

「素敵なストーリーだわ。

完璧よ、リタ。」

キャシーは喜んでくれた。

私は青かつたハートに

ピンクを重ねて塗つた。

まだ真つ赤にはできないけど

ハートが死ぬことはなさそうだ。

東京に帰つたらヘアカットにいこう。

Kと別れてから

美容院に行つてない。

東京は

季節の変わり目の雨が続いていた。

旅から帰つて

荒れた生活の何かが変わった  
ということはなかつたけれど  
とにかく

「投げやり」はやめた。

何事も丁寧に考えてからやるんだ。

そうすれば

いつか立ち直れる。  
と思つことにした。

そういうば

アパートの近くに美容院があつたな。  
あそこでいいや。

「こらっしゃいませー。」

あら、こらっしゃはじめてねえ。」

いきなり女コトバのお兄さんですか。  
ま、いいや。楽しそうだし。

「ずいぶんな寝グセですねえ。お近くなのかしり?」  
「す、すみません。」

「もつたいないわよー、若いのにてー。」

あたしね、サトル口。

どうぞよろしく。

一生懸命きれいにしますよ。」

「はい。なんとかしてください。」

「あははは!大丈夫よ!リラックストリラックス!」

細かい静かな雨が  
やさしく見えた。

にさえもならなかつた  
だけど大切な  
恋の話。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8714c/>

---

結婚するまで

2010年12月21日14時53分発行